

学生の民主化要求デモ、そして胡耀邦総書記失墜と中国の状況が再び大きく揺れている。そろしたなかで、多くの人びとの胸に去来するのは、周恩来が生きていたら、という感懐ではないか。

イギリスの中国専門家ジャーナリストとして知られる著者は、一九六〇年にネパールで周恩来と単独会見して以来、彼の魅力とその偉大さに取りつかれ、膨大な資料を駆使して、本書を完成した。

著者は周恩来

の全生涯を中国革命の怒濤の流れのなかに見事に位置づけることに成功しており、そのディテールの彫りの深さという点では、著者も多くを負っている先行の周恩来伝、すなわち許芥昱

『周恩来—中国の蔭の傑物』(邦訳、刀江書院、一九七一年)、李天民『周恩来』(邦訳、時事通信社、一九七一年、実業の世界社、一九七三年)をしのぐとい

ってよいだろう。もとより、著者も語っているように、「周をどう見るかは、見る人の文化的背景によって違

らう」といえるが、著者は、「彼の後継者である鄧小平の時代が終わり、鄧の後継者たちが登場し消えていった後、人びとの心に残り続けるのは、毛よりも、他のだれよりも、周の仕事と人間性であろう」と語って、周恩来の足跡をきわめて高く評価している。

本書の庄巻は、三六年の西安

事変から延安時代にかけての毛沢東、張国燾、王明ら中国共産党首脳間の微妙な角逐を描いていることであり、また建国後の毛沢東と劉少奇の複雑な関係のなかでの周恩来をとらえている

ことであろう。毛を「衝動の人で即興の天才」と見る著者は、周を「計画好きで、厳格な節約家」と言い、また、毛が「気まぐれな水先案内人」なら、周は「忍耐強い甲板長」だと言う。とくに「毛と多少懐疑的な劉が

始めた」大躍進

政策において「毛—劉派に對抗したのは周だった」という見方はユニークであり、説得的である。

だが、文革中の周恩来に関して、その役割を著者のように肯定的にとらえてよいのかどうかについては、私自身、彼が劉少奇や鄧小平を見捨てて「毛主席万歳！」を絶叫した場面を、この目で目撃して

いるがゆえに、それが「手の込んだ、そして究極的に見て骨の折れる道」だったとしても、林彪事件についての不透明さとともに、やはり大きな疑問が残る。

この点で本書は、周恩来伝の最高力作ということはできて、なお「決定版」とはいえないのではないか。田中恭子、立花文平訳。(時事通信社・二、二〇〇円)

東京外国語大学教授

中嶋 嶺雄

周恩来

不倒翁波瀾の生活

ディック・ウィルソン著

膨大な資料から生涯を評価